

【資料】

長期入院を経験した小学生への原籍校の教師による 学習支援の実態

工藤玲亜*1 橋本美亜*2 扇野綾子*2 遠野千佳子*2

(2024年1月10日受付, 2024年3月13日受理)

要旨:【目的】1.長期入院を経験した小学生への原籍校による入院中から復学後の学習支援の実態を明らかにする。2.原籍校の教師が医療従事者に求める支援を明らかにする。【方法】青森県内の小学校校長を対象とし、質問紙調査を実施した。【結果】85部の回答が得られた。長期入院中の児童の対応は18校が経験していた。児童が入院中の原籍校の対応は教材配布が最も多く、今後実施できることは教材配布、遠隔授業が多かった。児童の復学後の対応は声かけが多かった。原籍校側が今後、医療従事者に求める支援としては、患児や教師へのアドバイスの他、「入院中の患児の学習に対して、見守りや声かけを行う」ことが求められていた。【考察】入院中は教師よりも児童と過ごす時間の多い医療従事者が、児童に対して学習を見守っているという姿勢を見せ、頑張りを褒めるなどのリアクションを伝えるなどの支援が必要である。

キーワード: 看護, 学習支援, 長期入院, 小学生

I. はじめに

文部科学省によると、平成25年度中に、日本国内で長期入院した児童生徒は約6300人おり、在籍児童生徒が長期入院した小・中学校は約2400校あったことが分かっている¹⁾。病気やけがが理由で連続して10日以上欠席した児童生徒の学習補償の実態に関する先行研究では、入院している児童に対して、原籍校が学習の補償をしていると答えた学校は、小学校で57.4%であること、学習の補償としては、入院している児童生徒に対してプリント配布をすることで学習支援を行っている²⁾ことが言われている。

また、全国の小児病棟を対象とした調査では入院中の児童生徒に対する教育制度が確立している病院がある一方で、「子どもの自主性に任せている」「特になにもしていない」とし、学習状況を把握していない病院もあるという報告³⁾がある。さらに、涌水ら⁴⁾は、「復学支援をやるべきだが、やれていない」、「復学支援の仕方やタイミングが分からない」といった看護師が抱く復学支援に対するジレンマについても述べている。

健常小学生に対する文部科学省が実施した令和4年度全国学力状況調査では、授業時間外での勉強時間が多い児童よりも少ない児童の方が、学力調査での問題正解率が低いという結果が示されている。また、「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)」という質問では、「あまりしていない」「全くしていない」

と回答した人は約3割いる⁵⁾という結果が得られており、小学生では自主的な学習が困難な児童もいることがわかる。

義務教育の始めである小学校での学習は、今後の学習の基礎となると考えられる。長期入院を経験する児童は、この重要な期間に入院することにより、学習の遅れが生じ、児童の将来や進学などに影響する可能性がある。そのため、児童の学習の遅れに対して、入院中から復学後までの学習支援体制を充実させることが児童本人にとって大切である。そして、支援の充実には原籍校と医療従事者の連携が重要といえる。

しかし、原籍校側が入院している児童に対してどのような学習支援をしたいと考えているか、医療従事者とどのように連携したいと考えているかについては明らかにされていない。そこで、本研究の目的を、1.長期入院中または長期入院を経験した小学生への原籍校による入院中から復学後の学習支援の実態を明らかにすること、2.原籍校の教師が医療従事者に求める支援を明らかにすることとした。本研究により、原籍校のニーズが把握でき、医療従事者と学校との連携体制を整えるための示唆が得られると考える。

II. 対象と方法

1. 対象者

青森県内の小学校校長(全249校)を対象とした。本調査では学校としての取り組みについて調査するため、小学校校長を対象とした。

2. 調査方法

青森県内の市町村の教育委員会に研究協力依頼の手紙を郵送し、小学校校長へのアンケート配布について許可を得た。許可を得られた市町村の小学校校長へ依頼文およびアンケート用紙を送付した。アンケートは無記名自記式と

*1 弘前大学医学部保健学科
Hirotsaki university school of health sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町 66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan

*2 弘前大学大学院保健学研究
Hirotsaki university graduate school of health sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町 66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan
Correspondence Author hashimia@hirosaki-u.ac.jp

し、記入後、返信用封筒に入れ投函してもらった。調査期間は令和5年6月～8月である。

3. 調査内容

- 1) 長期入院していた、または現在長期入院中の児童の在籍状況
 - 2) 入院中の児童の院内学級への転籍の有無
 - 3) 入院中の児童に対する原籍校による学習支援の内容
 - 4) 入院中の児童に対してこれから原籍校はどのような学習支援を実施したいか
 - 5) 長期入院から復学した児童の対応経験の有無
 - 6) 復学後の原籍校による学習支援の内容
 - 7) 復学後の児童に対してこれから原籍校はどのような学習支援を実施したいか
 - 8) 今までの原籍校に対する医療従事者からの支援内容
 - 9) 今後、医療従事者に求める支援
- なお、長期入院の期間については定義していない。また、3, 4, 6, 7, 8, 9 は複数回答ありとして調査した。

4. 分析方法

単純集計および質的に分析した。

5. 倫理的配慮

研究への参加・不参加は自由であること、参加することに同意しない場合でも何ら不利益を被らないこと、プライバシーを保護すること、研究終了後も資料は保存することを、用紙にて説明しアンケートを実施した。また、研究への参加の同意の有無についてアンケートの最初の項目で確認した。所属機関倫理委員会の審査を受け、実施した(HS2023-007)。

III. 結果

1. 対象者の属性

青森県内 40 市町村のうち各教育委員会の許可の得られた 26 市町村 149 校へ質問紙を郵送し、85 部の回答が得られた(回収率 57.0%)。現在長期入院をしている、又は長期入院を経験した児童の状況は、「在籍あり」が 18 校(21.2%)であった。また、「在籍あり」と回答中で、院内学級への転籍については、「転籍した」が 12 校(66.7%)であった。長期入院から復学した児童への対応の経験の有無については、「経験あり」が 17 校(20.2%)であった(表 1)。

表 1 対象者の属性

長期入院時の在籍の経験	なし	67 (78.8%)
	あり	18 (21.2%)
院内学級への転籍	転籍した	12 (66.7%)
	在籍したまま	5 (27.8%)
	無回答	1 (5.5%)
復学後の対応の経験	なし	67 (78.8%)
	あり	17 (20.0%)
	不明	1 (1.2%)

2. 原籍校による学習支援の実態と今後の希望：児童の入院中

「在籍あり」と回答中で、児童の入院中の原籍校による学習支援の実態については、「プリントやドリルなど教材配布」が 10 校(55.6%)、「特に何も行ってない」が 4 校(22.2%)、「遠隔授業」が 2 校(11.1%)、「病院へ訪問して一緒に学習する」が 2 校(11.1%)、その他が 7 校(38.9%)であった(図 1)。

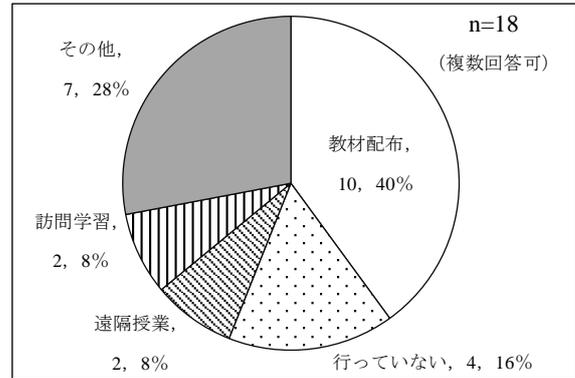


図 1 原籍校による学習支援の実態

その他の回答を表 2 に示す。「タブレット学習」、「患児の病状とコロナ渦で面会できなかった」、「週に 1 度、担任が学習について院内学級と連絡をとる」、「1 週間の時間割をメールで送り、参加可能な時間に授業へ参加してもらった」、「オンラインでお互いの近況報告をしていた」などが挙げられた。

表 2 学習支援の実態のその他の回答

実施した支援
・タブレットに動画や問題を用意しておき、都合の良い時間にできるようにした
・学習について院内学級と担任が連絡をとる
・担当医師、理学療法士と面談をした
・1 週間の時間割をメールで送り、参加可能な時間にオンラインで授業に参加してもらった
・国語、算数の一部を個別に授業した
・オンラインで近況報告をした
・お便りを保護者に渡した
学習支援を実施できなかった理由
・コロナ渦で病院に行くことができなかった
・児童の状態が重篤で教材を渡せなかった
・院内学級に転籍したため

今後の学習支援に関してできると思うことについて、児童の入院中の対応経験が無い学校も含めて調査したところ、「プリントやドリルなど教材配布」が 77 校(90.6%)、「遠隔授業」が 71 校(83.5%)、「病院へ訪問して一緒に学習する」が 22 校(25.9%)、「その他」が 11 校(12.9%)であった(図 2)。

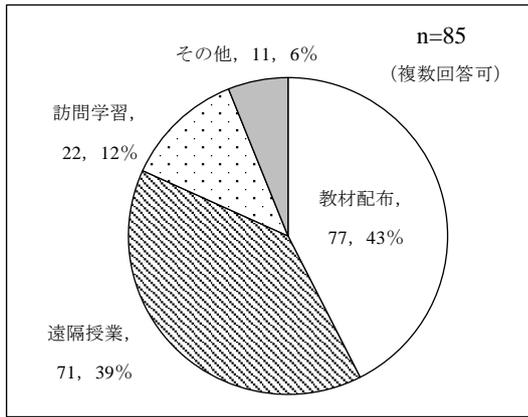


図2 原籍校による今後の学習支援の希望

その他の回答を表3に示す。「通信学習」「AIドリル」「長期休業中の訪問授業は何日か実施できると思う」などが挙げられた。一方で、「多忙な学校の現状ではなかなか実施は難しい」「入院施設のネットワーク環境による」「院内学級に頼るしかない」という意見もあった。

表3 今後実施した学習支援のその他の回答

実施したい学習支援
・オンラインでのリモート授業を実施する
・AIドリル教材の学習履歴の確認と補充学習
・長期休業中の訪問授業
・院内学級の教師との情報交換
・学校と自宅間でのリモート授業
実施できない理由
・多忙な中での実施は困難である
・入院施設のネットワーク環境による
・院内学級への転籍, 院内学級に頼る
・入院している児童との接触は困難である

3. 原籍校による学習支援の実態と今後の希望：児童の復学後

児童の復学後の学習支援について「経験した」回答中の、児童の学習の遅れがあった場合の現在の対応について当てはまるものを選択してもらい、具体的な内容を記載してもらった。具体的な内容について表4に示す。「日々の学習(授業)の中で声がけを行う」が10校(58.8%),「放課後を利用して学習を一緒に取り組む」が5校(29.4%),「クラスメイトに協力をお願いし、クラスメイトから学習支援を行うようにする」が4校(23.5%),「通常に加えて、コミュニケーションを多くとる(授業時間外)」が3校(17.6%),「夏休みなどの長期休暇を利用して学習時間を設ける(補習する)」が2校(11.8%)。「家族に学習支援の必要を伝え、家族に任せる」が1校(5.9%),「学習の遅れに対して、これまで支援を行う必要はなかった」が1校(5.9%),「その他」が11校(64.7%)であった(図3)。

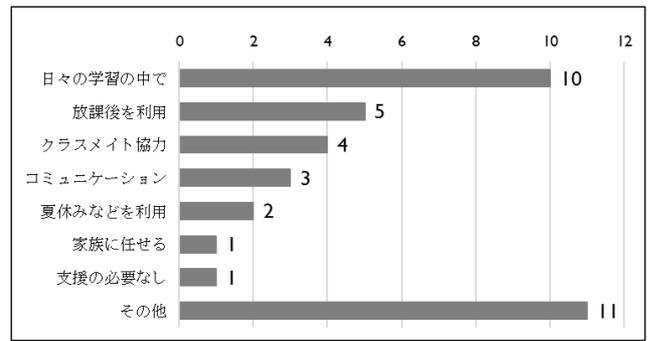


図3 原籍校による復学後の支援の実態(n=18)

その他の回答を表4に示す。「教務主任や管理職が個別指導を実施した」「担任が日々の授業で指導する内容を精選し、負担を減らすようにした」「保護者, 本人の納得するまで進学先を話し合うなど, 寄り添い対応した」などが挙げられた。一方で、「現在の多忙な学校の状況の中では, 長期の学習の遅れへの対応は学級担任では困難。管理職が対応するか, あるいは教育委員会から支援員を派遣してもらうようにしなければ対応できないと思う」という意見もあった。

表4 復学後の支援の実態(具体的な内容)

日々の学習(授業)の中で声がけを行う
・日々の教育支援と同様に(差別化とにならないように)支援を行う
・できることを褒めたり, 励ましの声がけをしたりした
・学習状況を確認し, 指導, 支援が必要な場合はその都度行う
・「大丈夫?わかるかな?」など学習内容の理解度を確認する声がけをした
放課後を利用して学習を一緒に取り組む
・毎日30分間, その子も含め学習が定着していない子や学習したい子への授業を行った
・休み時間には, 他の児童を巻き込みながら, 教師が本人と一緒に遊ぶようにした
・未履修の学習をプリント等を活用して行う
・クラスメイトに協力をお願いし, クラスメイトから学習支援を行うようにする
・仲のよい子に声がけし, 学習で困っていることがあったら, 教えたり, 助けたりしてあげるよう働きかける
・学習が遅れが目立ったので, ドリルを使ってクラスメイトから学習支援を受けるようにした
・子ども同士の学び合いはとても有効
通常に加えて, コミュニケーションを多くとる(授業時間外で)
・できること, できないこと, 体調面について多くコミュニケーションを取るようにした
・クラスメイトと一緒に関わるができる時間を設定した
・休み時間に一緒にできそうな遊びに声をかける
夏休みなどの長期休暇を利用して学習時間を設ける(補習する)
・夏休み帳や宿題などを中心に休んでいたためにその子が自力でできないところを補習した
家族に学習支援の必要を伝え, 家族に任せる
・家族のフォローに助けられた
その他
・担任以外の教員(教務主任, 管理職)が個別指導を実施した
・担任が日々の授業で指導する内容を精選し, 負担を減らすようにした
・登校時間の調整や別室での個別指導からスタートした
・家庭学習として終わっていないドリルに取り組みさせた
・本人や保護者とのやり取りから, 復学後の様子を聞き取り, 困り感に対する支援を行う
・本人の友達と交流したいという願いをもとに勉強よりまず交流を大切にしている
・現在の多忙な学校の状況の中では, 長期の学習の遅れへの対応は学級担任では困難。管理職が対応するか, あるいは教育委員会から支援員を派遣してもらうようにしなければ対応できないと思う

児童の復学後について、原籍校が今後どのような学習支援を実施できるかについては、「日々の学習（授業）の中で声かけを行う」が73校（85.9%）、「放課後を利用して学習を一緒に取り組む」が65校（73.0%）、「夏休みなどの長期休暇を利用して学習時間を設ける（補習する）」が64校（75.3%）。「通常に加えて、コミュニケーションを多くとる（授業時間外で）」が50校（58.8%）、「クラスメイトに協力をお願いし、クラスメイトから学習支援を行うようにする」が32校（37.6%）、「家族に学習支援の必要を伝え、家族に任せる」が17校（20.0%）、「その他」が18校（21.2%）であった（図4）。

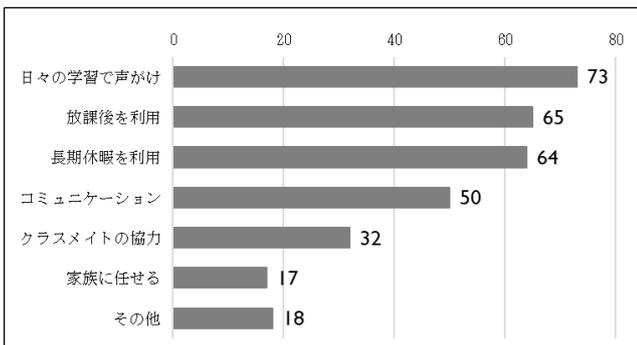


図4 原籍校による今後の復学後の支援の希望(n=85)

その他の回答を表5に示す。「休み時間などを使い、遅れている内容の復習をする」「家族に任せるのではなく、家族とともに遅れを取り戻す」「リモート授業を行う」「一斉での学習ができるようになるまで、取り出し指導を行う」「医師や保護者などチームで協力して個別の教育支援計画や指導計画を作成する」などが挙げられた。一方で、「多忙な業務の中で、特別対応を行う機会を設けられるか不安、イメージがわからない」という意見もあった。

表5 今後行いたい復学後の学習支援

個別指導、補習
・休み時間などを使い、遅れている内容の復習をする
・遅れが目立つ教科で授業時間内に個別指導を行う
・一斉での学習ができるようになるまで、取り出し指導を行う
・医師や保護者などチームで協力して個別の教育支援計画や指導計画を作成する
家族と協力する
・家族に任せるのではなく、家族とともに遅れを取り戻す
・家庭学習での補充学習や復習
・保護者との連絡を密にとり、遅れないようにする
コミュニケーションから始める
・学習に負担をかけるまでには時間が必要であるため、交流→徐々に生活リズム→学習の流れで考えている
学習が遅れないように支援する
・リモート授業を行う
・オンラインでのサポートをする
実施は困難
・多忙な業務の中で、特別対応を行う機会を設けられるか不安、イメージがわからない

4. これまでの医療従事者からの支援と今後医療従事者に求める支援

これまで学習支援を行ってきた中で、医療従事者から実際に受けた支援内容については「患児が学校生活を送るうえで必要な注意点などのアドバイス（教師に向けて）」が10校（76.9%）、「患児本人が学校生活において、健康上気をつけるべきことに関する指導（患児に向けて）」が10校（76.9%）、「入院中の患児の生活の様子について情報提供」が6校（46.2%）、「入院中の学習量の情報提供」が4校（30.8%）、「医療従事者が原籍校との連絡体制を確立し、仲介役として連携を行う」が3校（23.1%）、「患児の心理的サポート」が3校（23.1%）、「入院中の患児の学習に対して、見守りや声かけを行う」が3校（23.1%）、「原籍校と患児の親との連絡体制を作り、仲介役となる」が2校（15.4%）、「患児のクラスメイトに対して、患児の状態を説明する」が0校（0%）、「その他」が5校（38.5%）であった（図5）。その他の回答としては、「時間割を看護師にも送ることで、検査や採血の時間をずらしてもらった」「病院内の様子や保護者の思いをお互い知らせ合った」「復学に向けてのチームカンファレンスをスタッフと実施した」などが挙げられた。

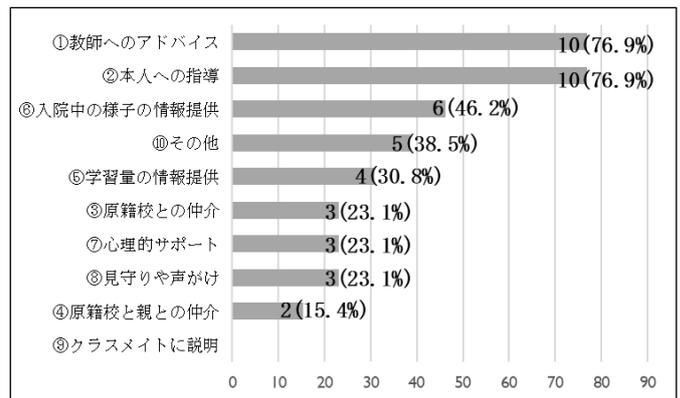


図5 医療従事者から実際に受けた支援(n=18)

今後、医療従事者に求める支援については、「患児本人が学校生活において、健康上気をつけるべきことに関する指導（患児に向けて）」が73校（85.9%）、「患児が学校生活を送るうえで必要な注意点などのアドバイス（教師に向けて）」が72校（84.7%）、「患児の心理的サポート」が61校（71.8%）、「入院中の患児の生活の様子について情報提供」が49校（57.6%）、「入院中の患児の学習に対して、見守りや声かけを行う」が33校（38.8%）、「医療従事者が原籍校との連絡体制を確立し、仲介役として連携を行う」が30校（35.3%）、「入院中の学習量の情報提供」が29校（34.1%）、「原籍校と患児の親との連絡体制を作り、仲介役となる」が23校（27.1%）、「患児のクラスメイトに対して、患児の状態を説明する」が10校（11.8%）、「その他」が4校（4.7%）であった（図6）。

その他の回答では、「医療従事者は学習のことは後回しになってしまうのは仕方ない」「学校では、患児・保護者の意向に寄り添いたいため、学校ができることを選び、実施をチームで話し合う」「遠隔授業のための Wi-Fi 環境の整備」などが挙げられた。

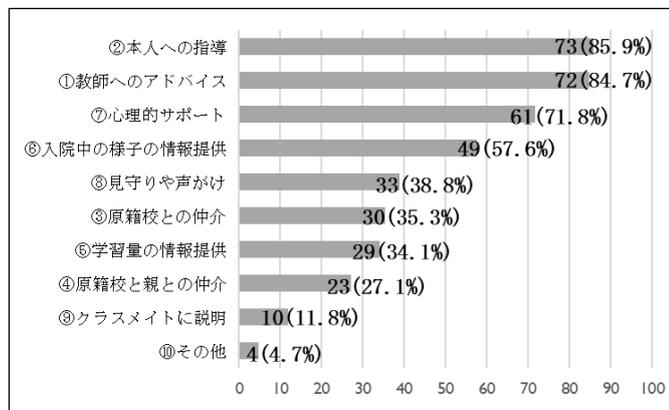


図 6 医療従事者に求める支援(n=85)

IV. 考察

1. 児童の入院中について

児童の入院中の現在の原籍校による学習支援の実際と今後に関しては、「プリントやドリルなど教材配布」が最も多かった。教材配布は学校側にとっては教材を配布することのみの実施であるため、行いやすい支援であると考えられる。保護者を通して教材を渡すこともできるため、教師自身が児童のもとを訪れることができなくても実施可能であることから、実施している学校が多いと考えられる。

また、現在行っている支援では、「遠隔授業」は少なかったが、今後行いたいものに関しては「教材配布」と並ぶ程多い結果となった。現在青森県では児童一人一人に、パソコンやタブレットを配布している市町村もあり、長期入院児を対象としてだけでなく様々な事情の児童に対して対応できるようになってきている。2006年の河合ら²⁾の調査では、長期欠席児に対する学習補償がほとんどであり、遠隔授業は実施されていなかった。IT技術の進歩、教育現場での導入が進んだ現代だからことの支援方法であると言える。しかし、オンライン授業に関する先行研究において、中村⁶⁾は、自主的かつ計画的に学習する習慣が身につけていない受講生にとっては、学習を計画的に進めることができず、課題を貯めこんでしまうなどの問題を抱えてしまった可能性が考えられると述べている。さらに田中⁷⁾はオンライン授業について、課題の多さ、自己管理の難しさ、内容の理解不足、教員・友だちとの交流不足、モチベーションの低下や、健康面への悪影響などがデメリットとして明らかになったと述べている。

このようなことから、小学生では自主性や自己管理能力が重要視されるオンラインでの遠隔授業を実施するのは難

しい可能性がある。子どもの性格や意欲、入院環境や治療の状況など様々な要因を考慮した個別性のある対応をすることが必要であると考えられる。また、遠隔授業での学習支援が受けられることになっても、周囲の大人、つまり看護師や医師など子どもとかわる医療従事者が子どもの学習状況を確認したり、声掛けをしたりするなどの支援を行う必要があると考えられる。

原籍校に対する今までの医療従事者からの支援と今後の医療従事者に求める支援の両方で「患児が学校生活を送るうえで必要な注意点などのアドバイス(教師に向けて)」「患児本人が学校生活において、健康上気をつけるべきことに関する指導(患児に向けて)」が多い結果となった。さらに求める支援では、「入院中の患児の学習に対して、見守りや声かけを行う」の回答も挙げられた。教師は医療従事者へ児童に対する身体面(健康面)での支援を求めているが、学習支援に関しても、医療従事者の介入を求めていることがわかった。

徳永⁸⁾は家庭学習に関する取り組みについての研究において、50ページや100ページなどの一定のページの節目を超えた児童に賞状を与えており、児童はこの賞状を大変楽しみにしている。また、「自分がした事に自信があったときにいつも先生からのメッセージがすごく楽しみで、もっとがんばろうという気持ちになれます」という声があったとしている。そして、特別な支援を必要とする児童に対する取組においても、一人一人の児童に対する丁寧な支援によりやる気を高めると述べている。長期入院している児童は、教師と接する時間よりも看護師や医師などの医療従事者と関わる時間の方が多い。児童が学習面での課題を実施したことに対するリアクションを医療従事者から伝えることが大切であり、そこからやる気も高まると考えられる。看護師が日々の業務の中で、医療処置、看護ケアだけでなく、児童に対して学習を見守っているという姿勢を見せ、頑張りや褒めるなどリアクションを実施することは入院中の児童に対する心理的サポートとなり、重要であると考えられる。

2. 児童の復学後について

児童の学習の遅れがあった場合の現在の対応に関しては、「日々の学習(授業)の中で声かけを行う」「放課後を利用して学習と一緒に取り組む」が多かったが、今後の学習支援の希望については、これら2つに加えて「夏休みなどの長期休暇を利用して学習時間を設ける(補習する)」も多い結果となった。しかし、その他の回答で、「多忙な業務の中で、特別対応を行う機会を設けられるか不安、イメージがわからない」という声も挙げられたことから、教員の多忙な現状では困難なこともあると考えられる。

また、その他の回答では「家族に任せるのではなく、家族とともに遅れを取り戻す。」という声も多かった。柏木ら⁹⁾は、学習意欲の向上には、子どもが保護者や地域住民と

単にかかわるだけではなく、かかわりを通じて保護者や地域住民からのあたたかさや支援を受けていると子ども自身が感じられているかどうかを鍵となろうと述べている。また天笠¹⁰⁾は、家庭学習の成否のカギを握るのは、子ども自身であるとともにやはり保護者であって、保護者に自覚を促すという観点からどこまで迫れるかがポイントとなると述べている。ここから、学校側が家族と連携をとることが重要であり、家庭と協力して学習支援を進めることは、有効な支援方法の1つとなると考えられる。藤村ら¹¹⁾は、保護者が子どもの学習を支える意識をもっていたとしても、具体的な方法がわからない場合もある。保護者を啓発するに当たっては、教師が学級通信などで、学校でどのような学習をどのように行っているのか丁寧に伝えるとともに、発達段階に応じた望ましい家庭学習の方法や課題解決の手立てについて具体的な方法を示して協力を依頼する必要があると述べていることから、学校側が具体的な方法を明確に伝え、適切な連携をとることで、家族とともに学習の遅れに対応できると考えられる。

本研究では、入院中の児童や復学後の児童に対し、教員が多くの支援方法を検討していることがわかった。しかし、河合ら²⁾の研究でも述べられているように教員の人員不足、時間的制約、原籍校と病院との距離の問題など支援を実施すること困難な状況でもある。看護師をはじめとした子どもに関わる医療従事者は、そうした教育現場の状況も視野にいれながら、多職種のチームで子どもの学習環境を整えていく必要がある。

V. まとめ

- ・児童の入院中において、「プリントやドリルなど教材配布」による学習支援が最も多かった。
- ・今後行いたいものに関しては「遠隔授業」が多かったが、自主性や自己管理の難しさという面があり、小学生に対する学習支援としては難しい場合もあり、周囲の支援が必要だと考えられる。
- ・長期入院している児童は、教師と接する時間よりも医療従事者と関わる時間の方が多いため、医療従事者は日々の業務の中でも、児童に対して学習を見守っているという姿勢やリアクションを伝えることが必要である。
- ・復学後の支援においては、学校側が具体的な方法を保護者に伝え適切に協力していくことで、家族とともに学習の遅れに対応できると考えられる。

VI. 研究の限界

児童の学習支援においては、院内学級の教師と原籍校との連携が不可欠であるが、本研究では、院内学級の教師への調査は行っていない。また、本研究は小学校校長を対象

に調査したため、教師個人の考えについての結果は得られなかった。調査を継続し、より具体的な支援策を検討していく必要がある。

利益相反 開示すべき利益相反はありません。

謝辞 調査にご協力いただきました教育委員会、小学校校長先生に、心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省: 長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果(概要)。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/_icsFiles/afieldfile/2015/08/14/1358301_01.pdf (2023-11-6)
- 2) 河合洋子, 藤原奈佳子, 他: A 県における病気による長期欠席児童生徒の教育実態. 小児保健研究, 65 (3) : 467-474, 2006.
- 3) 金城やす子: 小児病棟における入院児の遊びと学習環境の実態について. 名桜大学紀要, 13: 29-38, 2007.
- 4) 涌水理恵, 平賀紀子, 他: 小児がんで長期入院を余儀なくされた児への復学支援を考えるー児・保護者・スタッフの復学に向けた思いとその変化に焦点を当ててー. 小児保健研究, 72 (6) : 824-833, 2017.
- 5) 文部科学省: 令和4年度全国学力・学習状況調査 回答結果集計 [児童質問紙] 全国ー児童(国・公・私立).
https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.nier.go.jp%2F22chousakekkahoukoku%2Ffactsheet%2Fdata%2F22p_401.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK (2023-11-6)
- 6) 中村哲之: オンライン授業(オンデマンド型)における教育効果ー教育心理学的観点からの実践的検討ー. 東洋学園大学教職課程年報, 3: 1-14, 2021.
- 7) 田中稀穂: 大学におけるオンライン授業の実践と課題. 同志社大学教職課程年報, 10: 48-62, 2021.
- 8) 徳永未樹: 小学校段階における自己調整学習を促す手立てに関する研究ー自主学習ノートの活用に着目してー. 愛媛大学教職大学院, 1-14, 2021.
- 9) 柏木智子, 岩永定: 子どもの学習意欲に関する実証的研究ーその規定要因に着目してー. 日本学習社会学会年報, 10: 66-76, 2014.
- 10) 天笠茂: なぜ、家庭学習が大切なのか. 児童心理, 963: 1-10, 2013.
- 11) 藤村美由紀, 杉本任士: 小学校における望ましい家庭学習を推進するための方策ー教育実践家・教育学者の宿題に関する論説を通してー. 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要, 9: 145-154, 2019.

【Material】

Learning Support for Hospitalized Elementary School Students - Active role of Teachers at Their Original School -

REIA KUDO*¹ MIA HASHIMOTO*² AYAKO OHGINO*² CHIKAKO TONO*²

(Received January 10, 2024 ; Accepted March ,13 2024)

Abstract: Purpose: 1. To clarify the actual situation of learning support by the original school for elementary school students who have experienced long-term hospitalization. 2. What kind of support are the teachers seeking from the medical personnel? Method: We conducted a questionnaire survey targeting elementary school principals in Aomori Prefecture. Result: We received 85 responses revealing that 18 schools had had experience in supporting to children who were in the hospital for an extended period of time. The distribution of learning materials is currently the favored approach for educational support, and there are plans to maintain this method while also introducing remote lessons in the future. Once schooling resumes, frequent communication is the most common method of caring of children. The original school has a request for the future to "watch over and talk to the affected children during their hospitalization for their learning". Discussion/Conclusion: Rather than teachers, medical personnel who spend longer with the children during hospitalization need to support the children by showing them that they are watching over their learning and conveying reactions such as praise for their efforts.

Keywords: Nursing, Learning Support, Long Term Admissions, Elementary School Students